

積極的治療の適応ではないギアチェンジの段階にある進行がん患者の家族の思い

大川梓沙¹⁾、渡邊千春¹⁾

1) 新潟医療福祉大学 看護学部 看護学科

【背景・目的】 がんは、診断され、治療を受けていく中で、再発や転移、進行するという特徴がある。そのため、看護師は、患者・家族に長期的・継続的に関わっていく必要がある。その中でも、根治を目指した積極的治療から症状緩和を主とした治療の方向転換を提案された段階は「ギアチェンジ」と呼ばれ、患者・家族にとって特別な段階である。先行研究によると、ギアチェンジにある患者は、もう効果のある治療がわずかしかないという厳しい現実を突きつけられ「もう終わりかもしれないと追いつめられる」。また、がんの進行という現実を目の当たりにし、「命のカウントダウンを実感する」(今井ら 2020) とある。そのため、看護師は、患者・家族がどのように受け止めているのか(星名 2017)を知り、多職種と連携・協働をしながら支えていくことが重要だといわれている。

だが、先行研究では、ギアチェンジの段階にあるがん患者を対象とした研究はあるものの、家族を対象としたものはない。以上のことから、本研究は、積極的治療の適応ではないギアチェンジの段階にある進行がん患者の家族の思いを明らかにすることを目的とする。本研究を行うことにより、終末期に移行する患者・家族支援の一助となると考える。

【方法】

1. 研究デザイン 文献研究

2. 用語の定義

ギアチェンジ: がんそのものの消失もしくは縮小を目指すために行う手術や放射線、化学療法などの積極的治療から、症状緩和を主とした治療の方向転換を提案された段階。
家族: 援助者には決して代替できない情緒的絆で結ばれ、患者と互いに家族員だと認識し合う人々。

3. 研究対象

対象は、がん患者と死別後半年以内にある家族が綴ったWeblog(以下ブログとする)8件である。抽出方法は、Google chromeの検索エンジンで「がん家族 ブログ」のキーワードで検索をかけ、「末期がん 人気ブログランキングとブログ検索・病気ブログ」のサイトにアクセスした。サイト内のブログは、2020年7月17日時点で150件あった。その中で、選択基準を①家族本人が綴ったもの、②ギアチェンジの思いが書かれているもの、③治療中から死別後半年以内のブログ、とした結果、8件が該当した。ブログを対象とした理由として、ギアチェンジにある患者の家族の思いは、想起すること自体非常に辛い体験であるため、直接面談等で伺うことは倫理的側面から困難と判断し

た。闘病記等も検討したが、ギアチェンジの段階にある家族の思いが記述されている書籍が少なく、時間の経過とともに当時の思いが変化している可能性がある。そのため、より当時の思いが記述されているブログを対象とした。

4. データ収集および分析方法

内容分析の手法を基に行った。ブログを熟読し、ギアチェンジの思いが表れている箇所を意味内容が伝わる一文とし、コードとした。コードの共通性、類似性、相違性からサブカテゴリー化、カテゴリー化を行った。

なお、本研究はブログを対象とした文献研究であるため、出典を明示し、著作権を侵害しないよう配慮した。また、関連する利益相反(COI: Conflicts of Interest)はない。

【結果】

1. 対象の概要 患者のがん種は、肺がん2名、膵臓がん2名、胆管がん1名、子宮体がん1名、前立腺がん1名、原発不明がん1名であった。家族と患者との続柄は、妻が6名、夫が1名、娘が1名であった。

2. 積極的治療の適応ではないギアチェンジの段階にある進行がん患者の家族の思い

抽出されたコードは30であり、9サブカテゴリー、4カテゴリーに抽出された。以下カテゴリーを【】、サブカテゴリーを「」で示す。カテゴリーは、【衝撃と絶望感】、【家族としての役目に困惑】、【告知への葛藤】、【これからも支え続けるという決意】であった。【衝撃と絶望感】は、「希望が断たれショックを受ける」、「もう打つ手がないと感じる」、「死が近いと実感する」で構成された。また、【家族としての役目に困惑】は、「家族としてどうすればよいか悩む」、「誰でもいいから助けてほしい」で構成された。【告知への葛藤】は、「あえて本人に告知しなくてもいいと感じる」、「病気や余命を伝えられないことが辛い」で構成された。【これからも支え続けるという決意】は、「治療や生きることを諦めずに希望をもつ」、「本人の望む生き方を支えたい」で構成された。

【考察】 家族は、がんと診断されてから患者を支えようと自身の役目に使命感を感じている。そのような家族にとって、ギアチェンジを伝えられることは、今まで果たしてきた役目を否定された気持ちとなる。そのため、家族としてどうしたらよいか困惑すると考えられる。また、そのような中でも、患者の人生がより良いものとなるよう支え続けようと決意している。看護師は、家族が果たしてきた役目を認めながら、家族として何ができるかを共に考える支援が必要だと考える。

【結論】 積極的治療の適応ではないギアチェンジの段階にある進行がん患者の家族の思いとして、【衝撃と絶望感】、【家族としての役目に困惑】、【告知への葛藤】、【これからも支え続けるという決意】が抽出された。